

制裁を受けたりしていたことは常識になっていました。「やい、伍長殿と奉っていればいい気になりやがって大きな面をするな。貴様、何年メンコ飯を食ってきたというんだ」と、任官ホヤホヤの若い伍長に一発かませるといふ光景はよく見かけました。

寝台の上に胡坐をかいた古参兵の一等兵が初年兵の自分たちを呼んで、「お前たちに、ガチャグツと言ふ歌を教えてやろう」とニヤリしながら、「ガチャグツ、ガチャグツ靴の音 出てみりゃ兵隊さんの演習帰り大尉に中尉に少尉殿ウ。特務曹長、曹長、軍曹、伍長、上等兵、一等兵、二等兵は可哀想だなあ」というんだ。他に上は同じだが「伍長勤務は生意気で 粹な上等兵にゃ金が無い 女迷わず二つ星イ」とも歌うんだ。

日曜日で古参兵は外出しておらず、作業もないとき初年兵が集まり、やけくその声を出して歌ったものです。

ああ、我が青春は

シベリア万年初年兵

—死ぬものか 必ず帰るぞ 日本へ—

愛知県 清田 信

昭和二十(一九四五)年五月、ハイラルから興安嶺に来て陣地構築。八月、攻撃して来たソ連の戦車隊と交戦。十五日停戦。チチハルに下って武装解除され、貨物列車に乗り出発、行先は分からない。隙間から吹き込む煙で手も顔も真っ黒になる。海が見えてきた。港へ行くぞ、日本に帰れるぞ。列車が止まる、皆我先にと顔を洗いに走る。意外にも水は塩からくない。だれかが叫んだ「バイカル湖だ」。

列車はシベリアを向いているのだ。一瞬皆は声もなくなり、話をする人もなくなった。そして我々はシベリア、クラスノヤルスクに到着。収容所には四方に銃を持った兵隊が立っていた。こうしてわれわれのシベ

リア抑留生活が始まった。

私は満州一一八部隊内の第十二中隊に属し、初年兵の一等兵。クラスノヤルスク収容所では何組もの作業班に編成された。戦闘で別れ別れになった集まりだが、将校、下士官、兵隊みな知り合いの仲。旧軍隊生活の悪いところばかりをそのまま残した階級支配の抑留暮らしが続くことになった。

昭和二十一年、長い冬もやっと終わり。五月、各班一人で三十人、コルホーズ（国营農場）行きの指示が来た。トラックに乗って行くと森林に開かれた広い高地の農場に到着。下方にはエニセー川が流れ、周りには色とりどりの草花が咲いていた。一人の下士官と兵隊三人が待っていた。兵隊の名前はジンコーウフとザイツーにペトロフ。仕事はジャガイモ、ニンジン、キャベツの植え付けだ。夕方仕事を終えた後、私は監督の目を盗んで播いたジャガイモを掘り起こした。エニセー川の辺りで焼いていると、立ち上がる煙でジンコーウフに見付かってしまった。大声で怒鳴られる。でも手は出さぬ。日に涙が光っていた。なぜ涙か、私

は戸惑った。あとで分かったことだが彼の父親はドイツと戦い戦死した。彼は「母が故郷で私を待っている。ソ連軍は満州に攻めこみ、お前たちを連れて来たんだ。怒るのはつらい」と言う。そのころ彼らは日本語で、私たちはロシア語でお互いに話は少しずつ分かってきた。彼らは怒ってもあととは朗らかな兵隊だった。

集団農場に通う人たちも朝夕寄って「ドラスチー、ヤポンスキー、ソルダート（日本の兵隊さん、今日は）」と声をかけてくれ、「一度は日本に行ってみたい」と言う娘たちもいる。なんの差別もなく朗らかに「ロスイダーニア、ザフトラ（さようなら、またあした）」と手をふって行く。ふと出征の朝、手を振って別れた妹たちの顔が……。

やがて夏も過ぎ、秋の収穫を終えて再びいやな収容所へ戻ることになった。昭和二十二年、三回目の冬のこと、午前の仕事を終え昼食に行く。突然木村軍曹から「清田！ 貴様たるんどる。飯は抜きだ。そこに

立っておれ」と叱られる。仕事中心も注意されたこともなく、訳も分からぬままに立っていると食事当番がやってきて尋ねた。「軍曹殿、清田の食事はどうするんですか?」「そこに置いておけ」軍曹は私の食事を目の前で食べ始める。見ていても何も言えない同年兵たち。世が世であれば、われわれ同年兵は関東三年兵。恐いものなしなのに! 今は敗れてシベリアだ。日本から初年兵が来るはずもない。何年たっても俺たちは初年兵だ。

再び午後の仕事が始まって外に出る。零下三〇度か五〇度か、ともに食べても腹ペコだ。寒さより一番つらいのは空腹だ、この日のことは今も忘れられない。

入隊当初、鈴木伍長に「清田、前へ出ろ」とスリッパで往復ビンタ。口の中は傷だらけ「貴様のような奴がおるから皆が悪くなる。皆の代表だ。今日はこれで良し」と。これで「天皇陛下万歳」と笑って死ぬるか……。ああおれは非国民か……。何のお世辞も言えず口下手な俺。だが最初の戦闘で弾の来る中、鈴木伍長

が「清田、しっかりしろ。上等兵候補だぞ」と励ましてくれた時、万年一等兵と覚悟していた私はこれが軍隊か、よしやるぞと戦った。ここで別れ別れになったが一番会いたい人だった。帰って最初の戦友会でシベリアで亡くなったことを初めて聞いた。

鈴木伍長も初年兵時代、軍隊生活はみな同じだったかもしれない。だが敗戦からは変わってよいはずだった。私が初めて興安嶺で見たソ連軍の兵隊は、敬礼もせずに将校に近づき煙草の火を借りて「シバシイバ(有難う)」と言って去って行った。われわれの行ったシベリアでは当時マッチを持っている人はなかった。石とヤスリをすり合わせ、まるめた糸に火をつけていた。パンも何もかも配給だった。いくら寒くとも、ソ連の人たちには親しみを感じ、うらむ気持ちはなかった。

同郷から一緒に入隊した河合君と杉江君は体が弱くて帰国できるようになり、「お前も早く帰って来いよ」と言って帰った。おれも帰りたいが体が丈夫ではダメだ。シベリアの冬の夜は長い。いつか夢の中で故郷に

帰っている。あれもこれもと母にすすめられるが、いくら食べても味はなく腹ペコだ。ああ……また夢か。

日本に帰れなければもうどこでも良い。この収容所はどうもイヤだ。やがて冬も過ぎ、夏も過ぎ十月になって私たち（二、三百人と思う）に移動の指示が来た。

再びシベリア鉄道に乗ってさらに西へ行き、極東第一のクズバス炭田地帯のレニンスクに着いた。多くの日本人と別離された所にはドイツ人もいた。ここではノウバヤ、キロワ、カムサモールの炭坑があり、三交代で働いていた。私はノウバヤの炭坑で午前十二時から、八時までの番だ。初日にスコップを持って坑道を降りる。明るい所から急に暗くなる。カンテラの光だけで足元はよく分からない。上から水が落ちてくる。足が滑って転ぶ。あちこちからドカンドカンと爆発音が聞こえる。ダイナマイトだろうか。その時は一瞬、ああ、俺もここで死ぬかもしれないと思った。一体誰のために、国のためでもなく……。だがそれから日がたつて仕事にも慣れてくると、ここはクラスノヤルス

クに比べれば地獄と天国ほどの差がつく良い所だった。

坑内は冬も寒くない。夏も涼しい。時間が来れば皆仕事に行き、自分の仕事が早く終われば一人で帰れる。一緒に行く住民もわれわれと同じく働き皆明るい。この収容所長の藤沢等さんは大学出の二等兵だと聞いて驚いた。将校、下士官、兵隊の区別なく皆一緒だった。ここにきて長く続いた腹ペコも終わりをなした。

昭和二十三年二月になって、故郷に手紙を出すようにと一枚ずつ葉書が渡された。「元氣でいる。早くそちらの様子を知りたい。この手紙がつく時は帰る途中かもしれない」（悪いことは書けん、検査があるかもしれない）。

五月のメーデーを住民も明るく楽しむ。そのころ三人の将校がやって来て話があった。「ドラーズチ、ヤボンスキー（日本の皆さん、今日は）」「ダモイ、マールマラ、ラポータ（もう少し仕事をしたら帰れま

す)。「それまで気をつけて、よろしく頼む」と色々話した終わりに「皆さん、ロスキー、ハラショウ、マダム(好きな娘)はいないかね。お互いが良ければ私たちが話をしてあげよう。結婚してソ連人になれば皆同じです」と笑わせ、「ロスイダーニヤ、シバシーバー(有難う、さようなら)」と言って帰って行った。

六月の末、待っていた故郷の妹から手紙が来た「兄さん、お手紙ありがとうございます。みさ子も四歳、勝も二歳、母をはじめ皆元気です。兄さんと一緒に出征した杉江さんが来て、色々話を聞きました。兄さんはなぜ帰ってこれないの。早く帰って来て下さい。皆で待っています……」。以下妹の手紙によれば、私の出征三カ月前に結婚していた長兄は二年前、大陸の戦地から帰り、私の姪も元気のようにだ。今まで一番心配してきた故郷のことはもう何も心配することはない。

私の父は昭和十七年一月に亡くなっており、次男も同年の十二月、ニューギニアで戦死している。三男(私は四男)は昭和二十年七月、沖繩で戦死していたが、そのことは帰国後知った。母は二人の子の戦死を

悲しんで、墓石の裏に一句彫った。

「親心 涙で刻む 石ぶみぞ」 母つえ

十月になって帰国者の発表があり、私もその中に入っていた。あとに残る人も喜んでくれ、様子を知らせてくれと頼まれた。でも寂しそうだ。私はコルホーズで小虫に刺されたのが原因で、そのころ時々ラリアにかかっていた。帰国の前日は夜の十二時から八時までに最後の仕事を終え、朝日が差し込む出口で監督に「明日、日本へ帰れることになった」と言われた。監督は目が大きくギョロギョロと、怒れば青い顔になるので、当時私たちは「ノウバヤの鬼」と呼んでいた。大男の監督は「ハラショウ、オーチンハラショウ(良かった、本当に良かった)」と言って大きな手で私の手をしっかりと握り「清田、清田ムノウガー、ムノウガー、ロスイダーニヤ、ロイスダーニヤ(いつまでも、いつまでも、さよなら、さよなら)」と言った。

私は言葉も出ない。見れば青鬼の顔が今はえびす顔

だ。日本で聞いていたソ連とは……あだたいぶ違う。二度と会うことはないだろうが……。私は帰り支度のため再び収容所へ帰った。

今はロシア。あのシベリアの人たちは今ごろどうしているだろう。コルホーズで日本に一度来たいと言っていた娘たちは日本にこれただろうか。涙で怒るのはつらいと言った、あのジンコーウフは故郷の母と一緒に暮らしているだろうか。ノウバヤの青鬼さん！ ムノウガー、ムノウガー、ロスイダーニア、ロスイダーニア！

あれからはや五十余年。私は故郷に帰れて本当に幸せだった。戦友会も去年は宮崎、今年は京都、来年は伊良湖（渥美町）で十六回目。戦友たちは集まりを楽しみに夫婦同伴でくるものも多い。

だが親、兄弟、妻子の待っている故郷に帰れず、異国の地に眠る何万人かの人々。お互い励げまし、助け合っていれば幾人かの人が必要帰れたはずだ。

再び尊い命を奪い合う、軍国主義をくりかえさない

よう願って。

## 終戦から平壤・

### 延吉への手記

愛知県 外山 浅一

私は昭和八（一九三三）年八月、豊橋歩兵第十八連隊水谷主計大尉の推挙で建設要員として単身満州に渡り、関東軍経理部に軍属として採用され、経営科国有財産係として、軍の建設した建造物整理のため、全満各地に出張しておりました。

昭和二十年八月九日、ソ連越境戦争、八月十五日、関東軍司令部の移駐予定地の通化で終戦を迎えました。この通化で現役軍人と別れ、私たち非戦闘員である軍属は平壤（ピョンヤン）に疎開した軍司令部職員家族の援助に向かいました。八月末、平壤にソ連進駐と共に北朝鮮は独立し、私たちは平壤刑務所に収監されました。